

# 資料：公立中学校における集団指導の実践記録

加藤誠之<sup>1</sup>・矢野修<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>高知大学人文社会学系教育学部門 <sup>2</sup>元公立学校教諭)

Document : The Record of "Group Guidance" in Public Junior High School

Masayuki Kato<sup>1</sup> and Osamu Yano<sup>2</sup>

<sup>1</sup> Education Unit, Humanities and Social Science Cluster, Kochi University <sup>2</sup> Retired Teacher of Public Elementary School

**Abstract : Osamu Yano was a former teacher and Principal of public schools in Kochi Prefecture. He has written some books on "group guidance" or "classroom guidance" before. In this paper, Yano's practices of group guidance in public junior high schools will be recorded.**

キーワード：公立小・中学校, 集団指導, 実践記録

Key Word: Public Junior High School, Group Guidance, Record of Practice

## I はじめに

矢野修（やのおさむ）氏は、1934（昭和9）年に高知市で生まれ、1957（昭和32）年に葉山東中学校に赴任した。その後、高知県内の中学校を歴任し、1995（平成7）年、三水小学校・三水幼稚園を最後に退職した。その後、高知大学で非常勤講師として特別活動指導法を担当した。『きまりの指導のしかた（中学校学級づくりブックレット）』（1990、明治図書）、『どんとこい学級崩壊』（2000、南の風社）等の著作がある。今回は、矢野氏が教員として高知市内の公立小中学校に勤務した際の集団指導に関する実践記録を記録する。

## II 矢野修氏の実践記録

### 【実践例1】大規模校の集会指導

以下に挙げるのは、大規模の中学校で、教師集団60名が生徒集団1000名を指導した例である。新任式の感想文は以下のとおりである。

全体がざわざわとうごめいている。「おおすごい」。舞台の上から体育館全体にいつぱいの大きな「むれ」を見たときそんな感じがした。集団でなくそれはまさしく「むれ」であった。新しい学校の初めて生徒たちの前にたつた新任式の日のことである。集会係の先生がマイクで大声で「静にせー」と怒鳴る。しかし、生徒たちは一向にお構いなしざわざわと話は止まらない。ざわめきの中でそのまま新任の先生の紹介が始まる。今年赴任してきた先生は、私を含め十数名で何人か私もよく知らない。代表の先生が挨拶をする。緊張しているのか、静かにしないいらんなのか分からないが、エー、アーと、どもる。その都度、子どもたちはあざ笑う。それだけでなくわーわーと動きまわる。私たち新任教師は巨大な怪物の前で、しょぼくれてたたさされている子どものような新任式であった。新任式がこんなで翌日から学校が始まったが、この中学校に赴任して見たものは、私にとっては驚きの連続であった。今までの教師の経験で何にも役に立たないことを実感した。その当時の日記に次のような記録がある。

「学校はチャイムで行動し、集団として規律が保たれ、学校生活が成り立っている。しかし、チャイムが鳴っても教室に入らない子どもがいる場合学校が学校でなくなる。現に教室にはいない生徒がいると授業ができない。教室にはいない三年生の生徒を先生が追いかけて捕まえようとする鬼ごっこのように逃げ回る。他の教室を走り抜ける。中には自転車で廊下を走る生徒も居る。上級生の真似をして下級生にも、荒れが伝わってくる。学校中が騒然として授業どころでなくなってくる。」

このような状況の学校では、集団のおよぼすマイナスの影響「負の教育力」が大きい。集団の規模が大きければ大きいほどその影響が大きい。私たちはその「負の教育力」を「プラスの教育力」に代える「教師集団の教育力」を作り上げなければならぬ。一人二人の教師の力ではどうしようもない。しかし、今はどうしたら良いかわからない。

2学期になってから、私はまず集会指導に焦点を当てた。集会が生徒たちの荒れの伝達場所になっている。教師の指導が通らないことを生徒たちは目の前に見ている。一人一人の教師の力量ではなく教師全体に対する不信感が子ども集団に定着している状況である。だから、私は教師集団と子ども集団のヘゲモニー争いであるとおさえた。現在は完全に子どもたちにヘゲモニーを握られている。これを教師集団の手に取り戻さなくては教師が集会の指導することができない、と考えた。そこで、職員会に、次のような集会指導原案を提案した。

#### 【集会指導原案】「無言集会を成功させよう」

目的 ・集会で発表者の話を聞くことができるようにする。

教師の基本姿勢 ・無言集会を成功させるためには、教員全員の意思統一と統一された指導が大切になってくる。

・子ども集団と向き合う中で教師が絶対にヘゲモニーをとるべく激しい気迫を持って望むべきである。

・できるまでやり直しをする。例えば夜になることがあってもやりきるという心構えがもっとも重要になってくる。

学級担任の任務と具体的な指導

・担任はクラスの全員に無言集会の大切さを話し、無言でできるまでやり直しをすることを宣言する。

・やり直しをする場合は、発言した者のクラスと名前をみんなの前で公表し、その者のためにやり直しになることを自

覚させる。

- ・一回のやり直しには五十分かかることをクラス全員が自覚させる。
- ・例えば夜にかかることがあってもできるまでやるので、そのときは家庭に連絡する。
- ・絶対に自分のクラスから違反者をださないように全員で確認するように担任は気迫を示す。
- ・担任は学級で生徒に話をすると、すぐに体育館に移動し、自分のクラスの並ぶ位置に直立不動の姿勢で立ち無言の指導をする。

#### 担任以外の教師の任務

- ・担任を補佐するために全力をあげる。
- ・具体的な指導は、生徒が移動するとき廊下、階段、渡り廊下の要所に立って、無言で移動するように指導する。
- ・生徒が体育館に入ると、列の後ろに付き指導する

#### 集会系の先生の任務

- ・壇上からみんなを観察し、話をした者を見つけ、判断してやり直しを宣言する。

#### ・校長先生の役割

- ・校長は静かに話を聞ける状態が生まれたら、子どもの心に響く内容のある話をする。

職員会は、やれないときは夜になってもやり直しを繰り返すことは不可能だという意見をきっかけに、賛否両論の意見が噴出した。

反対意見の主なものは、「どのように指導してもやれる見通しが無い。やれないときに夜になると家庭への連絡も大変である。それに生徒の中には、塾に行っている者も居るし、夜までの指導は反対である。」という意見であった。最初の段階ではこの意見が大勢を占めた。賛成意見もあった。賛成意見の主なものは、「とにかく現状のような集会は改善しなければならないことは、はっきりしている。今までは、集会指導について、みんなで討議したことがなかった。できるか、できないかはやってみなければ分からない。他に案がなければこの案でやってみよう。」というのである。しかし、この賛成意見は反対意見に打ち消されてしまった。「やれる見通しが無い」という反対意見に押されて案が消されそうな状況になった。私は、頑張ってやっとならぬと継続審議に持ち込んだ。二週目の職員会では、賛否両論の意見がどんどん出て活発な討論となった。この指導には、全員関わらなくてはならなくなってくるので「人ごと」ではすまされない。だから非常に真剣な討議になった。この話し合いが次の教師集団の指導力になった。と私は考えている。

結果は「みんなが力を合わせてやってみよう」と決定した。私を含めてほとんどの先生方が一回の集会では不可能だろうと考えていた。静かになるのはよければ3回目ぐらいだろうか、と思っていたと推察する。それだけ困難な千人を越す生徒の集団であったのである。

しかし、あれほど荒れていた中学生が、なんと1回の無言集会が成功したのである。教師全員が驚いた。校長も赴任以来、初めて全校生徒の前で話のできたのである。1回で成功したのに感激したのは教師だけでなく生徒たちもほっとしたことであったと思う。

教師集団が集会の規律を取り戻したことで、その後の集会は「やり直し集会」を武器に、順調に経過した。だんだんと教師の説教集会から内容を改善し、生徒会の主権による集会に移行していくことになる。なお、この集会指導は、9月に入ってからであったが、1学年の学年集会は1学期の中頃、すでに生徒たちによる生徒集会が成立していた。この実践が成功であるかどうかの判断は別にして、当時の教師集団では驚いたし、自分たちの狙いは達成できたと私は思っている。

私はこの学校に赴任するまでは、余り管理や規則など学校の見かけを重視することには賛成ではなかった。だから、この実践のように教師の圧力で静かにさせるというやり方は好きではない。しかし、この学校に赴任してから考え方が変わってきた。集会での子どもたちのざわざわとした様子を見ると普通ではない。先生が前で話しているのに、隣と大声で話したり、ふざけてとっくみあいをやったりしている。中には、神社にあるような大きな鈴を持ち込んで、からんからんと鳴らす者もいた。日常生活では、チャイムがなっても教室に入らず、学校のあちこちに5~6人がたむろしてタバコを吸ったり大声で話し合うような状態である。この状態をみたとき、これはなんとかしなければならぬと考える様になった。普通のことが普通にできる学校を取り戻したいと思うようになった。この集会指導の実践を分析してみる。あれほど「荒れ」て、騒々しい千名を越す子ども集団が、なぜ一回の集会で「しーん」とした静かな集会ができたのか。

- (1) 教師集団の統一指導が子どもたちに受け入れられた。教師の統一指導がなぜ生まれたか。①指導原案があり、一人一人の任務と役

割が明確になった。②討議に賛成反対の意見が出て、十分話し合ったことが統一指導の原動力になった。③集会指導は担当教員だけではなく、教員全体が受け持たなければならないことが理解された。

(2) 生徒集団の中で変化が起きた。生徒たちは、先生を余り意識してなかったと考えているが、結局子どもたちは自分たちの集団を意識して静にしたのではないかと考えられる。やり直しになった場合に結局、自分たちの集団が恐い。下級生は上級生ににらまれることが恐ろしい。三年生は同級生に良くは思われない。結局、生徒一人一人が、自分たち集団全体を、恐ろしいと考えたのではなかろうか。

教師集団が生徒集団を指導する場合は、なんとと言っても教師集団がまとまらなくてはならない。集団がまとまるためにはリーダーがいなくてはならない。リーダーが管理的で注意・叱責・体罰中心の原案を提出しても、集団はついてこないだろう。私が立派なリーダーだとは思わないが、この時点では、他の原案がでなかったのが私がリーダーの役割を担ったことになるだろう。もっと違った管理的でない指導原案があったかも知れない。しかし、この時点ではこの案しか頭に浮かばなかった。このように、教師は集団を意識して指導する必要がある。この実践例は教師集団が生徒全体集団を意識した例であるが、次は学級集団を指導する事例をあげたい。

### 【実践例2】中学校の学級集団の指導

1年9組の実践である。この学年はいままでの実践の中でも、大荒れの学校の新入生である。上級生の実情は、次のようなものであった。始業のチャイムが鳴っても教室に入らない者が、授業妨害をする。先生たちは、彼らに席に着くよう注意・叱責を繰り返す。それを生徒はうるさがる。同時に口答え、反抗をする。同じことが毎日繰り返されて、ますます生徒は反発が抵抗を強めるようになってくる。クラスはますますバラバラになって授業ができなくなってくる。学校に来ることが苦痛になってくる。入学生は夢と希望をもって入学してきたと思う。その入学生を上級生のようにしてはならないと私は、決意した。どのようにして、この悪循環を打ち切るか、このとき、私は「教師にやらされる学級から、自分たちから進んでやる学級」にしたいと考えた。これには、集団作りを進めるのが適切であると思った。私は、次の学級目標を決めて発表した。「みんなで決めて、みんなで守る」と大きく書いて黒板のうえにはった。

自分たちで考え自分たちで行動するためにはクラスの全員が仲良くならなければと思う。38名の生徒全員が、すぐに仲良くなることは考えられない。そこでまず、班をつくる。

- ① 班作り 6名班が四つ、7名班が二つで、38名クラスである。最初は教師が、指導要録などを見て、偏りのない班をつくる。班長は立候補を含め互選で決定する。この班は、クラスの過半数の賛成があればいつでも変えてよいということをみんなに知らせる。
- ② 話し合いをする。

班で何をやるか、まず話し合いをする。班長が話し合いの司会をする。等を事前に話をしておく。何をはなすか、教師が原案を造り、それに沿って話し合いをする。

(原案例)

#### 1 学級目標

「チャイムが鳴ったら、30秒以内に席に着く」

#### 2 理由

学校はチャイムで行動するところです。休み時間と授業時間のけじめもチャイムです。だからチャイムが鳴ったらすぐに席に着くよう習慣づけましょう。

#### 3 期間

4月15日～4月20日まで、一週間

#### 4 点検方法

チャイムが鳴ったら、点検する人が前に立ちます。最初は先生。そして班ごとに席に着いたかどうかを点検します。

◎～ 全員が席に着いた班 ○～ 一人付けなかった班 ～二人以上付けなかった班

点検が終わったら、黒板の班別の表に印をつけます。

#### 5 表彰

◎印が四つ以上の班は表彰します。

## 6 その他

第二回目から各班毎に目標を決め、学級の目標を決めます。クラス全体で目標を達成した場合は、お祝いをします。

第1回学級総会の内容は以下のとおりである。

議長 『ただ今から、1の9組の第1回学級総会をひらきます。姿勢・礼』

『今日は、初めての総会ですので議長は先生がやります。総会の進め方がわかってくれば、みんなの代表に議長をやってもらいます。』

議長 『最初に、先生に何をはなしあうか、提案してもらいます。先生どうぞ』

私の二役である。そして自分で提案するのだが、のちのちは子ども自身かやれるようにするためである。(やってみせて、やらせてみて、ほめてやらねば人は育たじ)

先生 『提案します。原案はプリントにしています。これは、原案です。みんなが内容を変えようという意見にまともれば、変えることができるのが原案です。みんなは、プリントを良くみながら聞いて下さい。(プリントを読む)。以上説明は終わります。』

議長 『質問のための班会、3分』

私は、各班の間を周り、話し合い出来てない班を助言していく。

議長 『班会止め。質問のある班。手の早く上がった3班どうぞ。』

三班 『なぜ、こんなことをするのですか。』

先生 『それは、休み時間と授業時間の区別をはっきりするためです。』

五班 『なぜ、30秒なのですか。』

議長 『先生どうぞ。』

先生 『はい、答えます。それはトイレにいてチャイムを聞いてから教室に帰っても30秒以内で帰れます。先生が測って見ました。だから30秒以内です。』

議長 『他に質問はありませんか。』

四班 『質問があります。運動場で遊んでいたら30秒で帰れません。その時はどうしますか。』

議長 『先生どうぞ。』

先生 『はい。その時はどうすればよいか、みんなで考えて下さい。』

議長 『他に質問はありませんか。なければ賛成・反対の意見を出すための班会、5分。始め。』

この時の担任は、生徒たちの様子を観察し、分析する。積極的に発言する者、班会に参加しない生徒、意見がいっぱい出る班、ひっそりと静かな班、等、生徒の観察・分析に非常によい機会である。

議長 『はい時間です。班会を止めてください。一班はすぐやめました。協力ありがとう。意見の言える班。はい、6班どうぞ。』

六班 『反対意見を言います。反対理由は、こんなことを決めなくても、チャイムが鳴ったら席に着くのは当然のことです。だから決めなくても良いと思います。』

議長 『今の六班の意見に言いたいことがありますか。5班どうぞ。』

五班 『今の意見は決めなくてもよいということですが、当然だから決めてもいいものでないですか。5班は賛成です。』

四班 『はい、4班は反対です。さっきもいいましたが、運動場に出ていると30秒以内に帰れません。だから反対です。』

五班 『5班は今の意見に反対です。だいたい十分の休みは、トイレに行く時間で運動場に出て遊ぶ時間では無いと思います。』

私が考えていた意見が生徒の側から出た。

議長 『ずいぶん意見が出てきました。これまでの他の班の意見を聞いて、賛成か反対かもう一度班で話し合ってください。』

今までと違って班では活発に話し合いができています。この話し合いの過程が学級の生徒たちのまとまりに繋がっていくのである。

議長 『班会止め。3班と5班はすぐにやめました。ありがとう。意見のある班。』

2班 『はい、2班です。2班も決めることに賛成です。上級生の中には、チャイムがなっても席に着かず、先生に追いかけて、1年の教室を横切る人もいました。そのような先輩の悪い処を見習うことなく、9組はきちんと決めた方がよいと思います。』

5班 『5班も賛成です。理由は2班の言ったことありますが、先生に席に着きなさいと命令されるより、自分たちで決めて守った方が気持ちよいので決めることに賛成です。』

議長 『反対意見はありませんか。』

この2班と5班の意見が決定的になり、全体が賛成の雰囲気になってきた。しかし、男子の中に二名だけ乗り気になしで何となく、うるさいといった感じの生徒がいた。

議長 『他に意見はありませんか。それでは採決に移ります。採決のための班会をしてください。』

『やめ。個人で手をあげてください。賛成の人。』

『はい。絶対多数で、原案どおり決定しました。拍手して下さい。』

その後、9組は1週間毎に学級目標について話し合い決定し、みんなで取り組み、活発で楽しい学級に成長していく。そして、掃除も、他の学級の先生がうらやむほど、楽しそうで自分たちから進んでやるようになってくる。そして、なにごとでも学年のリーダー学級として認められるように育ち、そして、活動していくようになる。この学級と担任の実践の中で大切な要素がいくつかある。この実践を分析しながら、大切な要素を抽出する。

## ① 班づくり

- (1) 38名のクラスの全員を、話し合えるようにすることは非常に難しい。すぐには仲良くなることも困難である。だから班をつくり少人数で、話し合えるようにした。
- (2) 班変えは、クラスの過半数の生徒の賛成があれば、変えるようにした。それは人間関係が固定しないように、クラスの全員が交流できるようにした。実践的には約一ヶ月で班変えの要求が出るようになった。
- (3) 班員の人数は男女同数でバランスをとるようにした。最初は教師が班をつくったが、だんだん子どもたちにつくらせるようにした。
- (4) 班にすると班会の時に、子どもたちの動きが良くわかり、教師が観察するのに分析しやすい。

## ② 核づくり

- (1) 集団にはリーダーが必要である。このリーダーを核と呼んでいる。この第1回総会で核候補が明らかになってきている。「10分の休み時間はトイレ休みに運動場にする時間ではありません」とか、「上級生の悪いところを真似しないようにしましょう」とか、「先生に強制されてやるよりは、自分たちで進んでやる方が気持ちよい」とか、このような発言をした生徒は核候補である。
- (2) リーダーの質が集団の質に重なる。だから担任教師は、よきリーダーを育てなくてはならない。私はよきリーダーとは「弱い立場の子にやさしく世話のできる子ども」と意識して指導してきた。
- (3) 担任は、日常生活のいろいろな場面で、よき班長を探し、育てなければならない。
- (4) 私は、班長を立候補制にして、選挙で選び、その班長に自分の班員を選ばすようにした。そのとき、弱い立場の子どもを一人

は必ず入れることを考えさせることにしている。

- (5) 班長会を重視する。班長はお互いの苦勞や喜びを出し合い、苦勞を分かち合ったり、励まし合ったりすることで成長する。そしてクラス全体を見ることを意識するようになってくる。

ひとりぼっちの子、勉強についていけない子、忘れ物の多い子、遅刻の多い子、騒がしい子、いじめられやすい子、等の子どもは、弱い子といえるかもしれない。しかし、反抗する子、荒れている子は、見かけは強そうに見えるが、決して強い子とはいえない。それに、この子たちも、家庭的に恵まれてない場合が多い。また、他の理由があつて、反抗的であつたり、荒れていたりが多いため、このような援助の必要な子どもたちをまとめて、私は「弱い立場の子」というようになった。

### ③ 討議づくり

話し合いをするには、原案がなくはならない。原案は、最初の段階では、教師がつくらなくてはならない。原案をつくる条件はつぎのようなものである。

- 1 子どもたちの生活に関係していて、子どもたちの要求に沿った内容であること。
- 2 実行した場合、楽しくできて、みんなで協力できる内容であること。
- 3 一人一人が、何かに関わることができる内容であること。
- 4 次のクラスの活動に役立つものであること。

ただし、この条件は、必ず満たさなければならぬ条件でなく、あくまでも目安として参考にしてほしいというものである。実際に1年9組は、活き活きと楽しく、班で協力し合つて活動できる学級として発展していく。討議が発展するためには、反対意見が多くでなければならぬ。「当たり前のことだから決める必要がない」とか「運動場に出たら間に合わない」「そんなこと決めることは、めんどくさい」とか反対意見がでるほど賛成意見が多く出る。だから、反対意見もぶちこわし意見も大切にすることが必要である。また、話し合いが発展するほど、班の中の意見もできるようになり、みんなが意見を言うようになってくる。そして、班の団結力も強くなってくる。結局クラス全体が、ものを言いやすい状態が生まれる。私は、今の子どもたちの班が嫌いだとか、人と話ができない子どもが増えているのは、この学級での話し合いがないからではないかと考えている。中でも、班会に参加しない子どもを班長がどのように班会に参加さしていくかが、大きな課題になってくる。だから、討議の時間をどのようにつくっていくのか、学級運営の大きな課題である。私は週1回学級総会を1時間取り、毎日の終わりの会も、一日の総括会として大切にしたい。この話し合いが学級の発展に、大きく役に立つことになる。

#### [私の学級の終わりの会]

- |            |                         |
|------------|-------------------------|
| ① 姿勢・礼     | 班長順番制                   |
| ② 目標について   | 日直班から点検結果の報告            |
| ③ 掃除について   | 掃除の点検班から報告              |
| ④ 係について班会  | 係についてよかった点、立候補するための意思統一 |
| ⑤ 班会の結果報告  | 班で話し合ったことの報告            |
| ⑥ レクリエーション | 5分レク                    |
| ⑦ 明日の伝達    | 係から                     |
| ⑧ その他      | 何かあれば                   |
| ⑨ 姿勢・礼     | 一日の学級生活の総括、             |

### ④ 係の立候補制

学級で生活するには、係が必要である。その係を班で立候補して仕事をするのである。それは、やらされる仕事から、自分たちで進んでやる仕事への変化である。これは、核づくりにもつながるし、討議づくりにもつながる。何よりも生徒自身の「やる気」つながることとなった。係の班立候補制は、学級づくりの一環であるが、特にやる気・意欲につながる大切なことなので、別項目としてとりだした。私が学級においた係は黒板係、花係、伝達係、教室整備係、歌声係、新聞係等である。これらの係は、すべて班で立候補する。立候補するには、全員一致でやる気を示さなくてはならない。そして、意思表示も全員手を挙げなくてはならない。対立候補がいなければ当選決定である。最初は教師が決める。だんだん生徒議長に移ることになる。

はじめの段階は、係も二つぐらいで立候補させるが、立候補班が多くなってくると、係も多くなる。班が立候補するようになるまでに、やる気のないものを、やる気になるように説得しなければならぬ。このやりたくないものを説得するのが大変な苦勞がある。説得だけではなく励ましもある。この班の努力が仲間をやる気にさせ、班の団結を強める。そして全員一致の立候補に全員の手が上がるのである。

中には「係の仕事は、班のみんなで手分けしてやるので、仕事はするようばんき、手を挙げることだけ協力して」と説得する班もある。中学生になると、係とか、学級の仕事とかうるさがり、やろうとしない生徒が多い。それが、普通の生徒である。やりたくない生徒にやる気を起こすことが班長の仕事の一つである。最初は「手をあげよ」と命令する班長もいるが、このような命令中心の班長は選挙で当選しないようになり、「やさしく、説得する」班長が当選するようになってくる。この「やさしく説得」がだんだん「納得」になり、次の「やる気」を引き出していくようになってくるのである。この「やさしく説得」が他の活動にも生かされ、班が活発に活動し出す。

やっと説得して係に当選したのだから、仕事の内容も違ってくるし、協力もすごいものがある。たとえば、教室整備係は、机腰掛けの整頓だけであったのに、窓の開閉からカーテンの整備まで気をつけるようになってきた。黒板係も、放課後一回だけ黒板を拭くだけであったのが、毎時間の終わりに班員が交代で拭くようになり、白墨も色別に分けて黒板の端に置くようにしたりするようになった。

「やらされる係」から「自分たちでやる係」の違いを、まざまざと見た感じである。このやる気のないものを「やる気」にする説得と励ましの取り組みが、他のいろいろな活動に生かされるようになった。

#### (例1) チャイム着席

チャイム着席を学級で決定したにもかかわらず、反抗したりわざと遅れたりする生徒が必ずいるものである。でも班長はやさしく説得したり励ましたり、時には女子を使って手を引っ張って連れてきたり工夫をしていた。

#### (例2) 忘れ物を少なくしよう

クラスの中には必ず忘れ物をする生徒がいるものである。そのものたちにメモ指導をしたり、近所の生徒に頼んで家に行ってもらったり、いろいろと援助の仕方を考えていた。私も、明日の時間割と宿題と持ってくるものを書くためのメモ用紙を作って班長に渡した。班長も、これはよいと喜んでた。

#### (例3) 掃除の取り組み

掃除の取り組みについては、あとで詳しく述べることにするが、ここでは、班の協力について述べたい。学校が大荒れの中で、1年9組の子どもたちは、協力して、楽しく自分たちから進んで掃除をした。その時の班長の指導は、まさにやる気のない生徒の説得と励ましであった。

#### (例4) 宿題をやろう

当時、私のクラスでは、学校に教科書ノートを持ってこない生徒が2～3人いた。本人になぜか聞くと「遊びにきゆう」とはっきり答えるのである。私も夜間の家庭訪問したり、個人指導も重ねたが、なかなか勉強の方に気が向かなく困っていた。

そんなとき、ある女子班長が私に声をかけてきた。「先生、宿題を放課後、班でやっていますか」と。この班には、例の学校に遊びにきゆうがと言った生徒が一人いた。この女子班長は、優しく説得力のある班長である。私は「学校でやっていますよ」と許可を出したのである。許可した理由は、「この班長は、勉強に向けてくれるかも知れない」という期待と、例の勉強しない子の家庭では勉強できる環境でないということもあった。

その日の放課後、班で事前に打ち合わせしていたようで「今日は放課後残って、宿題やるよ」と班員に声をかけた。例の男子も、反抗もせずに残ったのである。そして、班長は、自分のノートをきった紙と鉛筆を渡し「隣の美代ちゃんのを写しや」と指



示したのである。彼は黙って言われたとおり、写しだったのである。私は驚いた、あの彼が鉛筆を持って書きだしたのである。

その後、他の班も「学校で宿題やってかえろう」と真似をさせた。私は、嬉しかった。みんなで協力して自主的に勉強しようと言うのであるから驚きであった。この運動も班長の「やさしい、説得と励まし」があったからだ、信じている。その後例の彼が教科書ノートを持ってくるようになったことも、うれしい驚きであった。

#### (例5) いろいろな活動

班長の「やさしい、説得と励まし」は、いろいろところで生かされるようになった。授業中の班学習のなかでも、分からない子や遅れる子どもへの援助など、普通に行われるようになってきた。その活動は、班長と班員の関係だけでなくクラスの普通の雰囲気になってきたのである。

いまの学校や、学級では、このような、助け合う、協力しあう集団が育てられていない。そのため、「いじめ」「自殺」「不登校」などの問題が後を絶たない。教師に求められていることは、集団を意識し、集団を育てる視点を持ち、実践する指導力がほしいと思う。

### ⑤ 掃除の取り組み

学校が荒れてくると、掃除がますます行き届かなくなり汚くなっていく。そしてだんだんと、便所の戸が壊されたり、壁に穴が開いたり、「荒れ」が目に見えてくるようになっていく。その壊されたところを放置しておくと、階段の壁が蹴破られたり、体育館の更衣室など、どんどん壊される箇所が広がってくる。これを防ぐためにも重要になってくるのが、掃除である。

まず、自分の学級から、「やらされる掃除」から「自分たちですすんでやる掃除」に変えようと、とりくんだ。例のとおり、原案をつくり、学級総会で「みんなで協力して掃除をやる」という目標で話し合い決定した。原案には、一つの班は掃除を外して点検班にする。点検班は掃除をしているところを点検して回る。そして、その日の終わりの会で、優秀班を決定し発表する、ことも決定した。

そして、毎日終わりの会で発表される。「今日の優秀班は、3班です。拍手して下さい」。3班は、万歳して大よろこびである。このようにして、「やらされる掃除」から「自分たちで進んでやる掃除」にかわってきた。2週間ほどして、学級目標に「みんなで、楽しく、協力しよう」ということにした。「楽しく」を入れたら掃除の様子が本当に変わってきた。鼻歌交じりで便所の便器を磨いている便所の掃除が、優秀班になって、大喜びである。私も黙って集中して掃除をすることが大切だと考えていたが、楽しく協力することも良いと思うようになってきたのである。この取り組みの中でも、班長の「やさしい、説得と励まし」があったとは欠かせない事実である。

保育園から大学まで、様々な子どもに接しながら最近思うことは、初めての人と話せない、自分から意見を言えない、コミュニケーションが苦手な子どもが増えていると感じている。特に学生の様子で、非常に気になることがある。私が大学で受け持った「特別活動指導法」は、教員免許を取る際の必修科目である。週1回、90分の授業で1コマ、多い時には4コマまで受け持った。私は最初に「皆さんは今後先生になるつもりなら、まず誰とでも話ができればなりません。そうやってほしいので、練習の意味もこめて、授業は班を中心にして、話し合いながら授業を進めます」と言って、くじ引きで班にわける。そのように話した日の感想に次のようなものがあった。

特別活動を受講し、最初にすごくショックをうけた。それは来週から班にすることである。聞いたとたん、指の先から血の引くことが分かった。指先が白くなり、心臓はばくばくして大変であった。確かに先生になるには、誰とでも話をしなければならぬ。それは理解できるが、わたしは人と交わることが苦手である。体の方が拒否反応を起こしてしまう。今度からの授業が不安である。

次の時間、この受講生は止めるかなと思ったが、出席していた。その時の感想である。

2回目の授業はどうなるかと心配でしたが、班に知っている友達がいる、少しは安心した。ゲームをやるうちに、なんとかなるかな、と思った。ほっとした。

この学生は最後まで受講した。最初の授業で「来週から班をつくりまします」と言っただけで止める学生が前期に2~3名、後期に4~5

名いる。やめずに来ている学生でも班会に参加できずに授業中出ていくので、聞くと、気分が悪くなって便所でもどしたそうである。「気分が悪くなったので帰らせてください」と申し出る学生もいた。国立大学に入学してくる学生だから、小・中・高校とまじめに勉強してきていると思う。点数学力は良いに違いない。しかし、人との交わりができない学生が意外と多いことに気がついた。ある学生に聞くと、学生同士でカラオケに行っても、人が歌うのも聞かず自分が次に歌う曲をさがす。みんながバラバラだという。このような状態を「みんなぼっち」と表現した。小・中・高校生 の年代にも、このように「人と付き合えない子ども」が増えている。多分ゲーム依存症が多いと思われる。それだけの理由ではないだろうが、これから先、いじめ・自殺・不登校・引きこもり 等の子どもが増えることがあっても減ることは考えられない。だから、特に小学校・中学校の年齢が若い時代に、集団を育てる教育的技法を身につけてほしいと願う。

## ⑥ 学年集会の実践

9組の活動を隣のクラスの担任が見て「矢野先生のクラスの生徒は、どうしてあんなに楽しそうに取り組むの?」と質問があった。チャイム着席にしても掃除にしても、喜んで取り組む生徒をみて、おどろいていた。「先生 やり方を教えて」と言われた。「みんなで決めてみんなで守る」の学級目標と話し合い原案を見せ、その後の取り組みを簡単に説明した。隣の先生だけに教えるのではなく、9組の実践を説明したが、1年の学年会にも提案した。各学級も9組のやり方でやってみようということになった。さらに、「学年集会」をするように、次のような提案をした。

### 〈集会の目的〉

- ① 学年、学級のリーダーを育てる。
- ② 学年執行部、代表委員、各委員会の委員長を中心に育てる。
- ③ 学年の一週間の活動をまとめの場とする。1 生活、学習、掃除、その他の活動の総括 2 学年全体の総括  
集会は、生徒中心に「育てる観点」で行い、同時に教師の協力指導を作り出すことに、重点をおいた。

### 〈集会の流れ〉

- |             |                |
|-------------|----------------|
| ① 姿勢・礼      | 執行部当番          |
| ② 集合評価      | 執行部            |
| ③ 生活委員会から   | 生活委員           |
| ④ 掃除について    | 整備委員長          |
| ⑤ 学習について    | 学習委員長          |
| ⑥ その他の委員会から | 各委員長           |
| ⑦ 各クラス1分自慢  | 各クラス代表委員       |
| ⑧ 学年の歌      | 全員             |
| ⑨ 先生の話      | 集会の評価を中心、説教はせず |
| ⑩ 集会態度評価    | 執行部            |
| ⑪ 姿勢・礼      | 執行部当番          |

「集会の流れに沿った」ある日の集会を示す。

「姿勢・礼 これから第五回学年集会を初めます。」

「今日の集会で最も協力的な学級は、3組です。最も協力的でない学級は7組です。次から注意して下さい」

「最初は生活委員会から」

「生活委員会から今週のまとめを発表します。今週のチャイム席で最優秀学級は3組です。理由は全員が協力してチャイム席を目標通り努力しました。3組に拍手して下さい。最も努力が足りなかった学級は7組です。7組は集会后この場に残して下さい。来週のことについて、執行部と生活委員会の合同で話し合いをします。」

「次は掃除について整備委員会ですどうぞ」

「今週の掃除の取り組み結果を発表します。今週の掃除の最優秀学級は1組です。努力目標が守れただけでなく協力的でした。1組に拍手して下さい。最も協力的でなかった班は、6組です。協力できでなく、ちりの残っているところがありました。明日の土曜日全員、残って下さい。先生たちと一緒にやり直し掃除をします。」

「続いて来週の目標について、整備委員会話し合った原案を提案します。目標点は40点です。この目標点で良いかどうか各クラス話し合ってください。」

「止めて下さい。原案に反対のクラスはありませんか。確認の意味で賛成のクラスは全員で手を挙げて下さい。それでは来週の目標点は40点とします。各クラス目標点をオーバーしないように頑張ってください。今週最も協力できなかった6組は、来週絶対に頑張るよう、学級で話し合ってください。どのように取り組んだか発表できるようにして下さい。以上で整備委員会は終わります。」

「次は学習について」

「最も良い優秀学級は3組です。理由は、発言も良く頑張り、集中も良かったからです。拍手して下さい。第二位は3組です。第三位は5組です。拍手して下さい。以上で学習委員会の発表を終わります。」

「他の委員会はありますか」

「各クラスの1分自慢を1組から発表して下さい。」

「1組は掃除で頑張り、協力して最優秀学級になりました。」

「2組は、教室にいつも花が飾られ、たれかが水を替えて世話をしています。」

「次に、先生の話です。」

「今日の集会で特に良かったと思ったことは、前週、掃除で最も協力できなかった1組が最優秀学級になったことです。もう一度1組に拍手。大切なことは、みんな努力することです。誰でも失敗をすることはありますが、人間の値打ちは、その失敗を努力して取り返すことです。その努力を重ねる、すばらしい学級をつくりましょう」

「次は学年の歌です。全員起立して下さい」「1、2、3、はい」

「以上で学年集会を終わります」「姿勢・礼」

「7組は、残って下さい。入口から近い9組から退場して下さい。」

全校集会が成立できない騒がしい集会であるとき、1年団の生徒たちは、生徒会主催の生徒集会を成立させていたのである。一学期の中頃である。全校集会の取り組みは2学期のはじめであった。この学年集会の果たす役割が非常に大切であった。クラスのリーダー、学年執行部、各委員会の委員長等、リーダーの成長につながった。

- ① よきリーダーが成長したおかげで、非行問題行動を起こす子どもたちに、影響を受けず、学校内では、普通の授業や生活ができていた。上級生の実情は、非行問題行動を起こす子どもたちに学年集団が乗っ取られていた。
- ② 校外で非行問題行動を起こす件数は、他の学年から言えば非行件数は多かった。にもかかわらず、学校内の生活はしっかりと落ち着いていた。このような状態が卒業まで続き、この学年が三年になったとき、普通の学校に戻ることができた。この学年集会を中心に教師集団も結束し、困った時相談し合える状態ができた。
- ④ 教師集団のまとまりが非常に大切であり、そのことが次の実践力を生み出すエネルギーになった。

いじめの指導をする場合、いじめた者といじめられた者だけを指導するのではなく、第三者であるクラスのリーダーや班長を呼んで一緒に話をする。私のクラスでは、いじめられた子どもの経験はないので、実践で答えられない。しかし、班長は、子どもの様子を一番知

っているので、班長抜きの指導は考えられない。私の実践では「やさしい世話のできる班長」を、育てるのを目標にしているので、いじめも事前に防止していると確信している。

### 【実践例3】

#### 非行の目立つ中学校での集団指導

当時の中学校を振り返って見ると、非行文化との戦いであった。非行文化は目立ちたがりやの文化というか、一番先に頭髪に現れる。モヒカン刈りや、男子なのにパーマをかけたたり、色いろいろの髪、春から紅葉が頭に咲くとか、賑やかな頭をしてくる。服装も短ラン、長ラン、ボン短、昔の袴のような裾のひろいズボンと、まるで、ファッションショーを見るようであった。女子も、へそだしルック、パンツが見えそうなスカート、パーマ頭、とにかく、普通の中学生と違う服装をして、目立ちたがりやであった。この者たちが、チャイムが鳴っても教室に入らず、日当たりのよい処でたむろして、わいわいとさわいでいる様子は、学校のようにとはかけ離れた状態である。非常ベルが誰かに押され、学校全体がパニック状態になり、授業どころでない、このような状態が毎日続くと、教師の役割は、いったい何だろうかと、考えさせられる。このような中で、一年団は、上級生に感化されないよう、懸命に努力してきた。そして、なんとか、授業が成立しているように見えたが、実情は大変な先生たちの努力があった。その授業面の取り組みについて、もう一度振り返ってみたい。

一学期初め、早くも授業中に勝手に歩き回って、私語もあり、授業妨害の傾向も出てきた。若い新卒の先生ではどうすることもできない。授業中に他の先生が入るのも問題がある。このような場合、普通の学校では、本人がしっかりせよということで終わる。しかし、この学年は違っていた。17名の教師が学級担任であると同時に、教科担任であるという年度初めの確認を具体化したのである。

そこで、とりあえず、あまりひどいときはやり直しの授業を放課後やろうということになった。A・B・Cの授業評価をし、Cがついた授業はその日の放課後、終わりの会が終わってから、学年の全教員が集まってやり直しの授業をやるのである。やり直し授業は、1年団全員の先生が授業を取り巻いて見守ると方法で行った。この方法では一定の効果をあげた。一度やり直しの授業をやったクラスは、二度とやり直しの授業をやることがなかった。しかし、放課後のやり直しは、他のクラス担任の負担にもなった。自分の学級の指導を切り上げて、他の学級の指導にまわらなければならないと言う手抜き指導をすることになる。それに、教科担任は、一人でその時間の責任は持たなければならないのに、一人で教える力がつかない。等の側面を持ちながら、一学期期間は、この方法で力を合わせた。2学期から、何か別のやり方はないか研究していたが、生活指導全国大会で学んだ、授業の三評価をやってはどうかと学年会に提案した。

	準備	発表	集中	合計
1班	A	1	A	7
2班	B	5	A	10
3班	A	3	B	8
4班	C	1	C	3
5班	B	1	C	4
6班	B	1	B	5

- ① 準備→ チャイム着席ができていないか、教科書・ノートが机に出ているかを点検する。  
この2点を見て、全員出来ていればA、一人できていないときB、二人以上出来ていないときC。
- ② 発表→ 発表・質問・読みなどの回数
- ③ 集中→ Aはよく集中できた班、Bはまあまあの班、Cは集中が悪い班、教科担任が評価する。

長時間の話し合いの結果、学年団では了解され、『やってみよう』ということになった。提案する私自身もやったことのない実践であるだけに不安もいっぱいある。しかし、やってみようということになったのは、次のような事情があったからである。

学校の内外では毎日のように、タバコ、シンナー、家出、万引き、車上あらし、いじめ、暴力、教師への反抗などが多発している。一

方、1年生でも非行問題行動を起こす者を中心に、ともすれば崩れよう、崩れようとする子どもたちをなんとか授業の出来る集団にしたいという願いがあったからである。このような願いは教師全員が持っているはずだが、なかなか実践で統一できないのが現状である。しかし、この学年は違っていた。17名教師全員が、授業の三評価を実践こうつした。この実践は教師にとっては非常にやりやすい授業になった。チャイムが鳴ると生徒全員が席につき、教科書ノートは準備されている状態だから、事前指導はいらないし、席立ちや私語も少なくなった。教師はやりやすくなった分、班長たちが苦労したと思うが、決して無駄な苦労ではなかったと私は思う。

教師の側から考えても、教材研究や授業の発展から考える様になり、特に設問も、生徒個人に質問するより、班に質問することが多くなり班学習を取り入れた授業を考える様になった。私の場合も数学であるが、班学習を頻繁に取り入るようにした。例えば、

\*方程式の解き方 → 教師の説明

\*個人学習(5分) → 分からないところを自分で見つけるための学習

\*班学習(10分) → 分からないところの出し合い、誰が質問するか決定

\*質問のある班 → 一斉に手をあげる。班長が本人に変わり質問する場合発言は2点 本人が質問する場合は3点

\*全員手の上がった2班』 → 『はい、2班には、問い1の②の方程式のときかたが分からない人がいます。もう一度説明して下さい』

\*この質問に前で説明出来るかどうかの班会2分。

\*「やめ。前で説明出来る班」「元気のよい5班」 → 「はい、5班は宮本君が説明します。」

\*『2班はわかりましたか』

\*『次の質問のある班』

個人の斉学習では絶対でなかった質問がだんだん出て来るようになった。最初の質問は、本人は出しづらいため、班長が代わりに質問するか、隣の親しい友達が質問するからだだったが、班のみんなの励ましで本人が質問できるようになってきた。私も、大学の授業や、招待されて初めてあう子どもたちの授業には、この班指名のやり方で出来るようになったのは、この時の授業が元になっている、と感じている。各教科の先生が授業の最後に黒板の左端に書いてある班ごとの判定をして授業は終わるようになっていたが、その記録を各クラスの学習委員が記録ノートに写す。だから、学級担任は、その記録ノートを見れば、自分のクラスの今日一日の授業の状態を知ることが出来る。学習委員が一日の集計をしやすいように、A→3点、B→2点、C→1点、と置き換えて、今日の学習の状態を点数で把握出来るようにした。学級担任は、その記録ノートを見れば、学級の現在の課題が明らかになる。このような利点も生まれた。

この授業の3評価は、他学年にはなかなか広がらなかったが、1年の学年に教えに入っている先生の中には、非常にやりよい、他の学年も真似できないかと好評であった。が、広がることなく、終わった。この学年は、授業の3評価と学年集会は、3年間卒業するまで続いた。この学年の下学年からは、授業の3評価を取り入れ、3年目で、全校の取り組みになり、チャイムが鳴れば教室に入る普通の授業が出来きる学校になった。私の願いは、チャイムが鳴ったら教室に入り、席立ちもなく、普通の授業が出来ることであつた。それには3年かかったが、一人では絶対できないことであつた。みんなが力を合わせなくては、教育は前には進めないとしみじみ思う。

平成29年(2017)10月12日受理

平成29年(2017)12月31日発行